

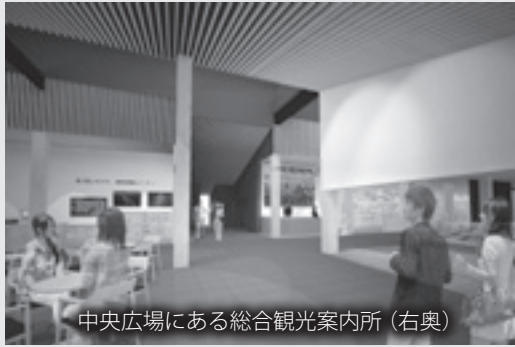


【第2回】 充実の総合観光案内所

来年春季に開業予定の(仮称)道の駅よねざわには、山形県の南の玄関口となる本市の立地を生かして、充実した総合観光案内所が開設される予定です。今回は、この総合観光案内所を紹介します。

* * *

(仮称)道の駅よねざわでは、市内はもとより、置賜や県内全域の観光・イベント等の案内、さらには宿泊予約などができるよう、観光案内コンシェルジュ(総合案内人)が常駐する予定です。道の駅にお越しのお客様に、米沢、置賜、県内全域を楽しんでいただけるようなプランを案内する窓口となります。



中央広場にある総合観光案内所(右奥)

また、外国人観光客が利用しやすいよう、多言語で観光案内ができる案内スタッフも常駐する予定です。
さらに、総合観光案内所では、旅行商品の企画販売により、温泉や観光地への誘客を行い、市内などの回遊を促進します。

より多くの皆さんに米沢、置賜及び山形県内の魅力を伝える場として、観光の活性化につながることを期待されています。



Chuta Ito 伊東忠太 (1867 - 1954)



出展：山形県立図書館

前回紹介した平田東助の甥で、名誉市民第1号の伊東忠太。忠太の生い立ちや業績を、2回に分けて取り上げます。

エピソード1

家系は代々続く藩医

伊東忠太は、慶応3年(1867)、米沢藩医・伊東祐順(平田東助の実兄)の次男として、米沢城下の座頭町(今の中央6丁目)に生まれました。伊東家は代々藩医の家系であり、祖父の昇迪は長崎でシーボルトに学んだ蘭学医、兄の祐彦は九州帝国大学医科大学の初代学長を務めています。

明治6年、軍医となった父

に従い、忠太ら家族も上京し、米沢を離れます。

エピソード2

法隆寺研究から世界へ 世界遺産の発見も!

忠太は第一高等中学校などを経て帝国大学工科大学、同大学院に進学、家業の医学ではなく造家を学びました。大学では辰野金吾・コンドルから西洋式の造家を学ぶ一方、日本の古代建築にも目を向け、明治31年に「法隆寺建築論」を発表して法隆寺が日本最古の木造建築であることが学術的に示されました。この業績により、第1号の工学博士の学位を受けました。

また、法隆寺の起源を古代ギリシャに求め、3年以上の月日をかけて中国・インド・オスマン帝国などで調査を行い、中国では雲岡石窟(現在世界遺産)を発見します。

エピソード3

「建築」という言葉を広め、日本建築学を確立

明治27年、忠太は「アーキテクチュール」の訳語として、技術的な意味合いの濃い「造家」から、より総合芸術的な意味を含む「建築」へと改めるべきだと提唱しました。この提言を受けて明治30年に造家学会は建築学会と改称、翌年には東京帝国大学の造家学科が建築学科と改められました。さらに忠太は日本建築史・東洋建築史の体系を樹立、こうした功績から日本建築学を確立したと評されます。教育面でも明治38年に東京帝国大学教授となり、退官後は早稲田大学・東京工業大学でも教鞭を執り、多くの建築家を育てました。